

大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（２） —特に大学生の葛藤喚起を介した社会認識について—

菅田 圭次^{*1} 小澤 一仁^{*2}

A Study of (2) on the Relation between University student Self-understanding and Social Recognition : About the Social Recognition through especially the Student's Conflict Evocation

Keiji SUGATA^{*1} Kazuhito OZAWA^{*2}

It chose on the theme of the contemporary social problem. The teacher in charge introduced the report of a newspaper or a magazine first. The analysis and the interpretation from an original special position were carried out. It asked for students considering a social problem with party-concerned consciousness. Furthermore, it aimed at having the opinion of one. In this paper, it is based on "the research (1) on self-understanding of a college student and the relation of social recognition" which pursued the meaning of education in humanities theoretically. The result of the questionnaire to an attendance student was analyzed. In particular, analysis of social recognition of a college student was conducted.

In time called a college student, realistic selection and determination are imminent as a subject in preparation for the near future. Students can say that there are various trials and freedom involving self establishment.

１．はじめに

大学における教育改革の勢いは、1991年に改定された大学設置基準以降目覚ましく、国際化と高度情報化の進展とともに個性化・多様化も叫ばれている。さらに、このような時代の流れに沿うように、社会もますます高度化・複雑化の様相を加速化している。そのような社会情勢にあつては、新たな分野を開拓できる人材と共に、社会に対応できる人材の育成も同時に行なわなければならない。大学においては、このような社会の変化に応えられるような教育改革が求められる一方で、少子化がもたらす影響が大学の経営課題として教育改革に拍車をかけている現状がある。大学の教育改革は第一は学生の付加価値を高めることであり、そのためのカリキュラムや教育制度、授業改革が展開されている。それらが一段落付く頃に求められてくるのとして溝上ら

1) は、大学生との接合であるとし、それは単に、授業評価や教育評価を学生に求めるというのではなく、学生の生き方に、大学がどう関わることができるのかという問題であると指摘している。

このような問題意識を踏まえ、本学では平成16年度から「現代社会と人A・B」科目が開設された。この科目は、工学部人間科学科目に属し、Aを前期開講科目、Bを後期開講科目とし今日的な社会問題をテーマに取り上げ講義し、講義内容と講義後の質疑応答の内容を踏まえ、自らの意見を600字程度にまとめて提出するという授業形態とした。講義担当者は本学工学部および芸術学部の基礎教育担当の教員による、オムニバス形式の授業である。今日的な社会問題に関しては、担当教員が新聞・雑誌の記事などを紹介しつつ、独自の専門的知見からの分析や解釈を加え、学生達が社会問題に対し当事者意識をもつて考え、自らの意見を持つことを目標としている。

^{*1} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター助教授 ^{*2} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター助教授
2006年10月3日 受理

本論文では、この科目の大学教育における教養教育的意義を原理的に追求した「大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究(1)」を踏まえ、受講生に対するアンケート調査の結果を分析している。特に、大学生の葛藤喚起を介した「社会認識」について分析を行なった。

2. 科目の内容

文明が高度に発達した現代社会は、人類に利便な生活をもたらしたと同時に、また新たな難問(アポリア)や課題を生み出している。これらの難問や課題について照会しつつ、現代社会を改めて考え直す力を獲得することを目指して講義を実施した。

授業はオムニバス形式で行なわれるので、毎回異なる教師が異なるテーマの講義を行なう。身のまわりに起きている具体的な事例について専門的な視点から分かりやすく講義し、講義終了後には15分程度の質疑応答時間が設定されている。これは知識を得るとともに担当教員や学友達の「考え方」に触れ、自らの「考え」を持つことが大切であるとの考えによるものである。したがって、質疑応答時間終了後、自らの意見を600字程度にまとめ、小課題として授業終了時に提出することを求めた。

授業科目の展開としては、半期ごとに次の2分野(1分野あたり4～5時限程度)に分け、合計12時限で構成されている。すなわち、前期は心に関すること(この分野を【A】と表記する)。コミュニケーション・表現に関すること(この分野を【B】と表記する)。後期には教育に関すること(この分野を【C】と表記する)。環境・生命に関すること(この分野を【D】と表記する)である。

3. 授業ごとの具体的なテーマ

(1) 授業内容

各分野の具体的なテーマは次のとおりである。

前期

- 1 回目 全体のガイダンス
- 2 回目 【A】 心の底の実感(本質観取)
- 3 回目 【A】 無意識からみた現代人の心
- 4 回目 【A】 男女共同参画社会の将来を考える
- 5 回目 【A】 心と肉体の密接な関係

6 回目 【A】 課外活動に見られる思考削除と成行き任せの論理

7 回目 【A】 まとめ1 現代社会における「心」を考える

8 回目 【B】 異文化におけるコミュニケーションの違い

9 回目 【B】 コミュニケーションの3つのスタイル

10 回目 【B】 自己表現力を高める

11 回目 【B】 心で走る 42.195km

12 回目 【B】 まとめ2 現代社会における「コミュニケーション・表現」を考える

後期

1 回目 全体のガイダンス

2 回目 【C】 形骸化した成人式に替わるもの

3 回目 【C】 数学が育む文化、数学を育んだ文化

4 回目 【C】 国際社会と応用言語学の役割

5 回目 【C】 私たちはなぜ学校へ行かなければならないか

6 回目 【C】 『スラムダンク』の読み方、『スラムダンク』から学ぶこと

7 回目 【C】 まとめ1 現代社会における「教育」を考える

8 回目 【D】 外界から身体内部環境を守る仕組み

9 回目 【D】 出生前診断と生命の倫理

10 回目 【D】 象徴としての富士山にみられる諸問題

11 回目 【D】 私たち生命はどこからきたのか

12 回目 【D】 まとめ2 現代社会における「環境・生命」を考える

(2) 評価

出席状況、小課題(10課題)とレポート課題(2課題)により総合的に評価した。出席点は12点。課題の評価基準は各教員間で申し合わせを行い、小課題3点×10回、レポート課題28点×2回、計100点で採点した。なお、小課題およびレポート課題は各テーマの担当教員が採点した。その際、教員間で採点基準を申し合わせ、評価のバラツキを最小限にするようにした

(3) アンケート調査について

本調査日は平成17年12月6日である。調査の実施は最終授業「まとめ2」の一部を利用し、集合調査によって時間内にアンケート

用紙を回収した。したがって、分析は後期開講の「現代社会と人B」であり、データの処理にはSPSS14.0 for Windowsを使用した。調査項目については、「大学生の自己理解と社会認識についての研究（3）－「現代社会と人」を通してみる学生における教育効果と自己理解・社会認識との関係－ 付表 アンケート用紙 参照されたい。

4. 基本的属性

表1 基本的属性

学年	1	2	3	4	合計
学科					
メディア画像	30	3	0	0	33
ナノ化学	12	1	0	0	13
建築	0	0	24	3	27
システム電子	26	0	0	0	26
コンピュータ応用	26	1	0	0	27
光情報	0	0	27	6	33
画像	0	0	8	3	11
応用科学	0	0	0	10	10
電子情報	0	0	7	3	10
合計	94	5	59	25	185

調査日の出席者 185 名の回答が得られた。主な内訳として、1 年生が 57.4%と 6 割近くであり、3 年生が 32.2%、4 年生が 12.9%と続き、2 年生は僅かに 2.5%であった。なお、女子は全体の 8.4%であったが、分析には性別の配慮はしなかった。

5. 受講後の態度変容について

1) 受講したことによって、学生の考え方や意識に

変化があったかどうかについて表 2 にまとめた。

加重変化が最も高かったのは、「国際社会と応用言語学の役割」「象徴としての富士山にみられる諸問題」「私たち生命はどこからきたのか」であり、ともに加重平均値 3.4 であった。変化の中身についての考察については、期待通りの効果であったのか等についての更なる検討が必要と思われる。また「以前からそうだ」などの反応を考慮する必要もあり、受講生の中に、テーマに関する問題意識やある程度の知識がある場合などには、「いまさら」「もっと詳しい内容を」と感じた可能性等も考えられるので、選択肢に「以前からそう思う」という項目があれば、多少異なった結果が得られた可能性を否定できないことは、考慮する必要があるだろう。

2) 受講後の感想について

本学実施の授業アンケート自由記述欄および課題（小課題、まとめの課題）での自由記述についての内容に触れておきたい。自由記述欄については表現の異なるものの内容が共通するものを一つの感想・意見としてまとめて記述する。なお、記述が多数に及ぶものではなかったため、数量については省略した。

【よかった点】

- ・将来のことを考えるようになった。
- ・自分を見つめなおす良い機会だった。
- ・今まで考えたことのないことを考えさせられた。
- ・人の考えや生き方を聞くことで、自分の考えの幅が広がった気がする。
- ・幅広い範囲の授業内容なので、人生や生活、生きることについて深く考えることができた。
- ・具体的に自分の将来が少しずつ見えてきたような気がする。
- ・いろいろなことに挑戦したいと思うようになった。

表2 受講後の認識・態度変化について

5: 変わった、4: どちらかといえば変わった、3: どちらともいえない、2: どちらかといえば変わらない、1: 変わらない

	5	4	3	2	1	無記入	加重平均値*
形骸化した成人式に変わるもの	19	50	67	9	34	6	3.1
数学が育む文化、数学を育んだ文化	8	29	89	17	37	5	2.7
国際社会と応用言語学の役割	10	43	92	10	23	7	3.4
私たちはなぜ学校へ行かなければならないか	32	59	60	10	19	5	3
『スラムダンク』の読み方、『スラムダンク』から学ぶこと	33	50	61	8	28	5	3.3
外界からの身体内部環境を守る仕組み	19	50	71	14	25	6	3
出生前診断と生命の倫理	35	52	61	8	22	7	3.1
象徴としての富士山にみられる諸問題	18	50	59	12	39	7	3.4
私たち生命はどこからきたのか	37	50	58	14	21	5	3.4

* 変わったを5点、どちらかといえば変わったを4点、どちらともいえないを3点、どちらかといえば変わらないを2点、変わらないを1点

- ・課題を書くことに慣れた。
- ・毎回どんな話が聞けるのか楽しかった。
- ・学問的レベルに関係なく一般社会の情報を取り上げた点。

【改善すべき点】

- ・興味のもてる時間とそうでない時間の差が大きかった。
- ・課題が多くて大変だった。
- ・学生同士の話がしたかった。
- ・質疑応答の時間の反応が消極的なときもあった。
- ・小課題作成の時間が不足していた。
- ・5時限目という時間。
- ・授業環境が悪い事（私語など）があった。

5. 現在の気持や考え方（1）

現在の気持や考えについて、一般的青年像としてあぶりだしていきたい。結果を表3にまとめた。

1) 全体的な学生像に関して

全体的にみると該当側（あてはまるプラスややあてはまる）が多いことに気づく。特に「自分の生活のペースを他人に乱されたくない」の該当側 149 人（81.4%）と「理屈より感覚ほうが大切である」の該当側 118 人（64.5%）の結果は、「マイペース」で「感覚的」という自分の好みで形成された生活圏内に安住し、他の人に合わせて生きることを苦手とする一般的青年像と合致しているといえよう。一方、

「今の自分ではいけないとあせりを感じる」の該当側が 150 人（82.0%）と非常に多く、さらには「自分が求めているものが何なのかわからない」の該当側も 90 人（49.2%）と半数の学生にみられ、真剣に生き方を模索している側面も多く、多くの学生にみられる。なお、「あせりを感じる」ことや「わからない」ことは、メンタルヘルス上の問題として示唆することのできる一方、適度な自省的傾向を意味するとも受け取ることができることに注意する必要がある。また「自分」に直接かかわるほかの2項目、すなわち「自分の生き方に自信がもてる」の該当側が 73 人（39.9%）と「自分は価値のある人間だと感じる」における該当側は 55 人（30.1%）で、それぞれ3割～4割である。誰もが自信に満ち溢れているわけではないことが分かり、このことからアイデンティティを模索する姿と受け取ることができる。つまり、「生き方に自信がもてる」と答えられないことが本当に「自信がもてない」ことを示しているとは、必ずしも言えるわけでは無いが、どちらも非該当側（あまりあてはまらない＋全くあてはまらない）の方が該当側より多くなっていることから、上の2項目と合わせ「アイデンティティ」の問題が見え隠れしている結果と考えてよいだろう。つまり、自分の適性や希望をある程度見極められた学生と、そうでない学生が同じくらいの比率で混在しているという意味に解釈できる。更には、上級生や教員の学術的な取り組み方や成果に圧倒されて、自分にはとて

表3 現在の気持や考え方

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	無記入
自分の生活のペースを乱されたくない	94(51.4)	54(29.5)	29(15.1)	6(3.3)	2
理屈より感覚の方が大切である	47(25.7)	71(38.8)	55(30.1)	10(5.5)	2
今の自分ではいけないとあせりを感じる	81(44.3)	69(34.7)	23(12.6)	10(5.5)	2
自分が求めているものが何なのかわからない	41(22.4)	49(26.8)	54(29.5)	39(21.3)	2
少しでも社会のためになることをしたい	40(22.0)	71(38.9)	52(28.4)	19(10.4)	3
期待に応えたいと思う人がいる	71(39.0)	59(32.4)	37(20.3)	15(8.2)	3
人生はそのときが楽しければよい	33(18.2)	54(29.8)	62(34.3)	35(19.3)	4
やりたいことをやりぬくためには、少しくらいルールを破るのもやむをえない	49(26.8)	74(40.4)	45(24.6)	15(8.2)	2
夢中になって打ち込めるものをもっている	82(44.8)	47(25.7)	41(22.4)	13(7.4)	2
自分の生き方に自信がもてる	20(10.9)	53(29.0)	84(45.9)	26(14.2)	2
今の社会では、まじめに努力しても報われない	30(16.4)	61(33.3)	68(37.2)	24(13.2)	2
自分のやりたいことができなくてつまらない	26(14.3)	47(25.8)	75(41.3)	34(18.7)	3
自分は価値のある人間だと感じる	21(11.5)	34(18.6)	95(51.9)	33(18.0)	2
他人の悩みやもめごとにはかかわりたくない	27(14.8)	51(27.9)	72(39.3)	33(18.0)	2
本当の自分を理解してくれる人がいない	13(7.2)	49(27.2)	73(40.1)	45(24.7)	5
何をするにしてもむなしい気がする	19(10.4)	43(23.6)	59(32.4)	61(33.5)	3
真の友といえるような親友はできないように思う	13(7.1)	22(12.1)	53(29.1)	94(51.6)	3
人と比較されることには抵抗感が強い	49(26.9)	57(31.3)	47(25.8)	29(15.9)	3
キャンパス内で自分らしさを表現できている	13(7.3)	62(34.6)	71(39.7)	33(18.4)	6
自分が友達からどのように見られているのか気になる	40(22.1)	66(36.5)	47(26.6)	28(15.5)	4
自分では良好な精神状態を保っていると思う	45(24.9)	67(37.0)	51(28.2)	18(9.9)	4
政治の動向に関心がある	35(19.3)	29(16.0)	48(26.5)	39(21.5)	4
結局、人は自己中心的だと思う	77(42.5)	60(33.1)	31(17.1)	13(7.2)	4

も無理だと消極的になってしまっていることも考えられる。現実的に適応しているようにみえる学生でも、弱さを含んでいるといえそうである。

2) 本当にやりたいことに関して

「夢中になって打ち込めるものをもっている」は「あてはまる」82人(44.8%)を含む129人(70.5%)が該当側で多いが、反面「自分のやりたいことができなくてつまらない」も73人(40.1%)と多い。

「打ち込めるもの」「やりたいこと」が「学内で行なわれるものなのか」「夢中になる理由は何か」といったような点の具体的内容については不明であるので、今後調べる必要があるだろう。さらに、大学として関与、提供できることの有無についても検討が必要と思われる。加えて、いわゆる「不本意入学者」としての意識傾向に関する側面に関しても考える必要があるが、明確な傾向を見出すためには、新たな調査が必要である。

「やりたいこと」に関して視点を変えてみると、「やりたいことをやりぬくためには、多少くらいルールを破るのもやむをえない」に対しての該当側が123人(67.2%)と多いことは注目される。「ルール違反」と引き換えにしても「やりたいこと」があることは幸せといえなくもないが、気になるところである。オールポート2)の指摘するように、この年代が道徳上の誤りや罪に対して重点をあまり置かなくなってきているためだろう。

3) 人生や社会に対する虚無感や無力感に関して

「人生はそのときが楽しければよい」といったいわば刹那的な考えについて、半数近くが該当側（「あてはまる」33人(18.2%)を含む87人(48.1%)である。また「今の社会では、まじめに努力しても報われない」といった考えにも半数の91人(49.7%)が該当側である。「すぐには報われなくても、まじめにコツコツ努力したところでその分いい目を見られるわけでもなし、将来に積み上げるより今楽しく過ごすほうがよい」ということなのだろうと思われるが、努力し積み上げていく姿勢について、古臭く感じてきているということも考えられる。このような「無力感」「空虚」「刹那的」とも受け取れる学生気質が意外に多いことに対し、大学としての対応策が望まれる。「何をするにしてもむなしい気がする」

においては、3人に1人62人(34.1%)が該当側と多くメンタルヘルス上の問題の初期としても、軽視できないと思われる。とくに「あてはまる」の19人(10.3%)の状況について考察することが課題と思われる。

4) 人との関わりに関して

まず、「期待に応えたいと思う人がいる」をみると、該当側が7割(71.4%)である。自分への期待を自覚していないわけではないのである。しかし「全くあてはまらない」も8.2%と1割未満ではあるが存在していることは忘れてはいけない。一方で「本当の自分を理解してくれる人がいない」について、該当側が62人(34.4%)と3人に1人いる。このような感覚を抱えている学生が少なくないことが分かる。なお、ここでの該当者には、「(わかってもらいたいの)に誰も本当の自分をわかってくれない(のでつらい)」だけでなく、「(わかってもらいたいが) わかってくれる人がまわりにいることなどは初めから期待していない(ので別につらくない)」や「かつて(高校時代など)は分かってくれる人がいたが、今の環境ではいない」も含んでいると思われる。さらに、「わかってくれる人がいない」と感じるかどうかは、人間関係に対する要求水準に依存するので、多数の友人に囲まれているように見える学生が「孤独」を感じていないとは限らないことに留意する必要がある。

「他人の悩みやもめごとにはかかわりたくない」該当側は4割78人(42.6%)にも上ることから、この割合をもって「個人主義的傾向」を指摘することはたやすいが、逆にみれば、6割105人(47.4%)は必ずしも逃避的ではないことがわかる。「悩みやもめごと」に係わるような人間関係を「うっとうしく」感じる青年像が報じられることがあるが、学生たちも皆そうであるとは限らない。ただし、この「他人」が「限られたごく小数の友達」以外を含むのかどうか、あるいは、「他人」がどのような場合に「かかわりたくない」あるいは「かかわってもよい」と判断しているのかについての考察を深めるべきだろう。

5) 社会とのかかわりについて

「少しでも社会のためになることをしたい」の該当側は6割111人(61%)であり、「みんな自分の

ことしか考えていない」といったイメージは、必ずしも正しくないことがわかる。「社会のためになることをしたい」という気持ちはあるのに、目の前に参加の機会とチャンネルが準備されていない、あるいは気づいていないために、結果的に何もしないので、非社会的（自己中心的）にみえる。という構造が考えられる。「社会のためになること」として、例えば「ボランティア」への関心が最近高まっているが、適切な機会とチャンネルさえあれば、参加してもよいと考える学生は少なからずいるのではないだろうか。

社会との係わりについて、戦後の「大学生と社会との関係」を振り返り溝上ら3)は、1960年代の過激に社会体制に反発した時代。また、1970年～1980年代の無関心、シラケ世代といわれた時代。さらに、1990年代のバブル経済崩壊後の産業界の改変作業と密接に絡んだ就職難、阪神淡路大震災以降のボランティア活動の確立などによって大学生の活動は社会と密接な関係へとつながるようになってきており、再び社会と共生し始めた時代と指摘している。しかし、それは過去にみられたような、社会体制や政治に参加したりそれらを改革したりする動きとは明らかに異なり、現代の学生たちは、あくまで自分が社会の中で何をすることができるのかという、「自己表現」の場としての路線上においての社会参加と分析している。「社会のため」というよりは、「自分のため」であることが根本的質的变化と捉えているのである。さらに、戦後の大学生に向けられた言葉を振り返ってみると、総じてネガティブな意味合いの表現という印象を受ける。例えば、「留年」「三無主義」「無気力」「アパシー」「モラトリアム」などである。これらの印象に関しても、溝上ら4)は、今日の大学生はダメだという一種の貶価的、軽蔑的、絶望的あるいは嘲笑的な論調が、研究にせよ評論にせよ支配的なのではないかと指摘し、その理由として、否定的な現象や突出した異色の現象は世論でも話題を呼ぶが、まじめで頑張った大学生の姿はなかなかマスコミでは取り上げられないからであろう。と分析している。

そのような点を踏まえ、さらに得られた結果を理解するにあたり、次のような問い掛けを意識する必要があると思われる。例えば「人生は、そのときが楽しければよい」「他人の悩みやもめごとにはかか

わりたくない」「やりたいことをやりぬくためには、少しくらいルールを破るのもやむをえない」といった設問で該当側の学生を批判することは簡単であるが、大人の世代でも、もっといえば我々自身でさえ、このように考えている人（本人の自覚はなくても）や、この行動原理で動いている人は、たくさんいるものと思われる。「少しでも社会のためになることをしたい」に我々自身「あてはまる」と信念を持って答えるだろうか。「自分が求めているものが何なのかわからない」は決して青年の特性ではなく、どのような世代にも見出されるのではないだろうか。我々自身は「夢中になって打ち込めるものをもっている」であろうか。「自分のペースを他人に乱されたくない」のは、学生よりもむしろ保守化した我々ではないだろうか、などである。

6. 現在の気持や考え方（2）

学生の「現在の気持や考え方（1）」についての考察をしてきたが、さらに詳しく現在の学生の考え方を探るために表3「現在の気持や考え方」の項目間相互のクロス集計（表4）を試みた。その結果「現在の気持や考え方（1）」での考察を裏付ける結果が得られたので、以下に有意な相関を示した項目を記載し特徴的な項目について若干の考察を加えた。

- 1) 「自分のペースを他人に乱されたくない」と有意な相関を示した項目は、「やりたいことをやりぬくためには、少しくらいルールを破るのもやむをえない」「今の社会では、まじめに努力しても報われない」「自分のやりたいことができなくてつまらない」「他人の悩みやもめごとにはかかわりたくない」「結局、人は自己中心的だと思う」「政治の動向に関心がある」である。このような考え方が自己中心的とみえるのであろう。自分自身が他者との間に互いに理解しあえる関係を、限られた人間関係や状態に限って形成しようとする態度がうかがえる。
- 2) 「理屈より感覚のほうが大切である」と有意な相関を示した項目は、「人生はそのときが楽しければよい」「人と比較されることには抵抗感が強い」である。「理屈より感覚のほうが大切である」と考える学生は、客観的評価として捉えにくい感情的側面を重視しており、人との比較に抵抗感を感ずるのもそのためと思われる。

[illegible]

3)「今の自分ではいけないとあせりを感じる」と有意な相関を示した項目は、「自分の求めているものが何なのかかわからない」「少しでも社会のためになることをしたい」「自分のやりたいことができてつまらない」「自分が友達からどのように見られているのか気になる」「何をやるにしても虚しい」「人と比較されることには抵抗感が強い」であり、負の相関としての項目は「自分の生き方に自信が持てる」「他人の悩みやめごとにはかかわりたくない」がある。

つまり、明確に自分のやりたいことをやりぬくことは、現実社会ではなかなか難しいこと。そして、「本当の自分」を設定すると、ますますあせりを感じてしまうこと。自分のことをまず明確にするまでには、他人とのめごとや混乱は回避したいということであろう。それでも社会との繋がりを希有しているものと思われる。

4)「自分が求めているものが何なのかかわからない」と有意な相関を示した項目は、「今の自分ではいけないとあせりを感じる」「人生はそのときが楽しければよい」「夢中になって打ち込めるものをもって」「自分のやりたいことができてつまらない」「何をやるにしてもむなしい気がする」「人と比較されることには抵抗感が強い」「自分が友達からどのように見られているのか気になる」「少しでも社会のためになることをしたい」「今の社会では、まじめに努力しても報われない」「真の友といえるような親友はできないように思う」であり、負の相関としての項目は「夢中になって打ち込めるものをもって」「自分の生き方に自信が持てる」がある。つまり、自分の打ち込めるものを模索しているが、なかなかそれが定まらずにおり、その不安定ななかでは、他人との比較や自分への評価が気になっているものと思われる。

5)「少しでも社会のためになることをしたい」と有意な相関を示した項目は、「今の自分ではいけないとあせりを感じる」「期待にこたえたいと思う人がいる」「自分が友達からどのように見られているのか気になる」「自分の求めているものが何なのかかわからない」「自分は価値ある人間だと感じる」がある。つまり、社会との関係、意味ある繋がりを希求しており、さらに、それを支える身近な信頼できる人がいると感じていることがうかがえる。

6)「期待にこたえたいと思う人がいる」と有意な相関を示した項目は、「少しでも社会のためになることをしたい」「夢中になって打ち込めるものをもって」「自分が友達からどのように見られているのか気になる」「自分は価値ある人間だと感じる」「キャンパス内で自分らしさを表現できている」である。負の有意な相関を示した項目としては「真の友といえるような親友はできないように思う」つまり、社会参加に対し消極的で、自分が打ち込めるものをもっていないことが分かる。そして、そのような態度が他人からどのように見られるのかということに頓着しない様子がみられる。

7)「人生はそのときが楽しければよい」と有意な相関を示した項目は、「理屈より感覚のほうが大切である」「自分が求めているものが何なのかかわからない」「真の友といえるような親友はできないように思う」「自分のやりたいことができてつまらない」「何をやるにしてもむなしい気がする」「人と比較されることには抵抗感が強い」である。負の有意な相関を示した項目としては「政治の動向に関心がある」「自分は価値ある人間だと感じる」である。つまり、人生はそのときが楽しければよいと思っている学生は、他社との交わりに薄く理解可能な他社を求めることもなく、それでいて他者との心情的な繋がりを希求している様子がうかがえる。

8)「やりたいことをやりぬくためには、少しくらいルールを破るのもやむをえない」と有意な相関を示した項目は、「自分のペースを他人に乱されたくない」「今の社会では、まじめに努力しても報われない」「他人の悩みやめごとにはかかわりたくない」「本当の自分を理解してくれる人がいない」であった。

9)「夢中になって打ち込めるものをもって」と有意な相関を示す項目は、「期待にこたえたいと思う人がいる」「キャンパス内で自分らしさを表現できている」「自分の生き方に自信がもてる」「自分は価値ある人間だと感じる」であり、負の相関としての項目は「自分が求めているものが何なのかかわからない」であった。

10)「自分の生き方に自信がもてる」と有意な相関を示す項目は、「自分は価値ある人間だと感じる」「キャンパス内で自分らしさを表現できている」「自分では良好な精神状態を保っていると思う」「夢中になって打ち込めるものをもって」があ

り、負の相関としての項目は「今の自分ではいけないとあせりを感じる」「自分が求めているものが何なのかわからない」「今の社会では、まじめに努力しても報われない」「何をするにしてもむなしい気がする」「自分のやりたいことができなくてつまらない」がある。つまり、自分の生き方に自信をもっている人は、肯定的に周囲を受容し、また肯定的に自分を受け入れている。また、自分に自信をもっているので、他者の評価にあまり左右されていない様子がうかがえる。

11)「今の社会では、まじめに努力しても報われない」と有意な相関を示す項目は、「自分のペースを他人に乱されたくない」「やりたいことをやりぬくためには、少しくらいルールを破るのもやむをえない」「自分のやりたいことができなくてつまらない」「本当の自分を理解してくれる人がいない」「何をするにしてもむなしい気がする」「人と比較されることには抵抗感が強い」「自分が求めているものがはできないように思う」であり、負の有意な相関を示した項目は「自分の生き方に自信が持てる」であった。

12)「自分のやりたいことができなくてつまらない」と有意な相関を示す項目は、「自分のペースを他人に乱されたくない」「今の自分ではいけないとあせりを感じる」「自分が求めているものが何なのかわからない」「今の社会では、まじめに努力しても報われない」「何をするにしてもむなしい気がする」「真の友といえるような親友はできないように思う」「人と比較されることには抵抗感が強い」「人生はそのときが楽しければよい」「自分が友達からどのように見られているのか気になる」であった。負の有意な相関を示した項目は「自分の生き方に自信がもてる」であった。

13)「自分は価値ある人間だと感じる」と有意な相関を示す項目は、「自分の生き方に自信がもてる」「自分では良好な精神状態を保っていると思う」「少しでも社会のためになることをしたい」「期待にこたえたいと思う人がいる」「夢中になって打ち込めるものをもっている」であり、負の有意な相関を示した項目は「何をするにしてもむなしい気がする」「真の友といえるような親友はできないように思う」「人生はそのときが楽しければよい」である。つまり、自分を価値のある人間だと思っている人は、安定した精神を保持しており、自信をもっているといえる。また、

人生を長期的に見つめているといえよう。

14)「他人の悩みやもめごとにはかかわりたくない」と有意な相関を示す項目は、「自分のペースを他人に乱されたくない」「やりたいことをやりぬくためには、少しくらいルールを破るのもやむをえない」「結局、人は自己中心的だと思う」「何をするにしてもむなしい気がする」「結局、人は自己中心的だと思う」であった。負の有意な相関を示す項目は「今の自分ではいけないとあせりを感じる」「少しでも社会のためになることをしたい」であった。

15)「本当の自分を理解してくれる人がいない」と有意な相関を示す項目は、「今の社会では、まじめに努力しても報われない」「何をするにしてもむなしい気がする」「真の友といえるような親友はできないように思う」「自分が友達からどのように見られているのか気になる」「自分のやりたいことができなくてつまらない」であった。負の有意な相関を示す項目は「自分の生き方に自信がもてる」「自分は価値ある人間だと感じる」であった。

16)「何をするにしてもむなしい気がする」と有意な相関を示す項目は、「自分が求めているものが何なのかわからない」「今の社会では、まじめに努力しても報われない」「自分のやりたいことができなくてつまらない」「他人の悩みやもめごとにはかかわりたくない」「本当の自分を理解してくれる人がいない」「真の友といえるような親友はできないように思う」「人と比較されることには抵抗感が強い」「自分が友達からどのように見られているのか気になる」「結局、人は自己中心的だと思う」「今の自分ではいけないとあせりを感じる」「人生はそのときが楽しければよい」であり、負の有意な相関を示す項目は「自分の生き方に自信がもてる」「自分は価値ある人間だと感じる」「自分では良好な精神状態を保っていると思う」である。つまり、ニヒリズム的な感じ方をしている人は、孤立的な状態にあるといえるが、それと全く隔絶しているというのではなく、信頼の希求と他者の評価を希求していることが窺われる。

17)「真の友といえるような親友はできないように思う」と有意な相関を示す項目は、「人生はそのときが楽しければよい」「自分のやりたいことができなくてつまらない」「本当の自分を理解してくれる人がいない」「何をするにしてもむなしい気がする」「人と比較されることには抵抗感が強い」「自分が

求めているものが何なのかわからない」「今の社会では、まじめに努力しても報われない」である。負の有意な相関を示す項目は「自分は価値ある人間だと感じる」「期待にこたえたいと思う人がいる」である。つまり、互いに理解可能な他社との好意的な関係が乏しい様子が窺われる。求めている関係は、充実した学生生活を過ごすための道具的・手段的な意味ではなく、自己の成長のためにであったりするのであろうが、これらの関係形成がうまくできていないことによる結果と思われる。

18)「人と比較されることには抵抗感が強い」と有意な相関を示す項目は、「理屈より感覚のほうが大切である」「自分が求めているものが何なのかわからない」「今の社会では、まじめに努力しても報われない」「自分のやりたいことができなくてつまらない」「何を करनेにしてもむなしい気がする」「自分が友達からどのように見られているのか気になる」「今の自分ではいけないとあせりを感じる」「人生はそのときが楽しければよい」であつた。

19)「キャンパス内で自分らしさを表現できている」と有意な相関を示す項目は、「夢中になって打ち込めるものをもっている」「自分の生き方に自信が持てる」「自分では良好な精神状態を保っていると思う」「期待にこたえたいと思う人がいる」である。

20)「自分が友達からどのように見られているのか気になる」と有意な相関を示す項目は、「今の自分ではいけないとあせりを感じる」「自分が求めているものが何なのかわからない」「少しでも社会のためになることをしたい」「本当の自分を理解してくれる人がいない」「何を करनेにしてもむなしい気がする」「人と比較されることには抵抗感が強い」「自分のやりたいことができなくてつまらない」「結局、人は自己中心的だと思う」である。つまり、自分が友達からどのように見られているのか気になる人は、自信を他者との関係で定位したいと思っており、また期待にこたえたいという開かれも内在化している。しかし、自信を持ってないことが他者の評価を気にしていることに繋がっていると思われる。

21)「自分では良好な精神状態を保っていると思う」と有意な相関を示す項目は、「自分の生き方に自信がもてる」「自分は価値ある人間だと感じる」「キャンパス内で自分らしさを表現できている」であり、負の相関をもつ項目としては「何を करनेにしてもむ

なしい気がする」である。

22)「政治の動向に関心がある」と有意な相関を示す項目は「自分のペースを他人に乱されたくない」「自分では良好な精神状態を保っていると思う」である。負の有意な相関を示す項目は「人生はそのときが楽しければよい」であつた。

23)「結局、人は自己中心的だと思う」と有意な相関を示す項目は、「自分のペースを他人に乱されたくない」「他人の悩みやめごとにはかかわりたくない」「何を करनेにしてもむなしい気がする」である。

7. 現在の不安や悩み

1) 不安や悩みの有無について

不安や悩みの有無については表5にまとめた。

表5 不安や悩みの有無 (N=181)

不安や悩み	1年	2年	3年	4年	計
もっている	80	4	59	19	162
もっていない	7	1	7	4	19

不安や悩みをもっているのは89.5%である。もっている割合は下級生46.4% (1・2年)、上級生43.1% (3・4年)と下級生の方が若干多い。「不安や悩み」については、自分が「もっている」「悩んでいる」等と自覚することと客観的な状況とは必ずしも一致しない可能性に留意する必要がある。

2) 不安や悩みの内容

不安や悩みについて表6にまとめた。

表6 どのような悩みか (N=162)

	該当者	1・2年(%)	3・4年
将来の生き方	91(49.2)	48(53.8)	43(47.3)
進路について	81(44.7)	32(39.5)	49(60.5)
自分の能力について	56(30.9)	28(50.0)	28(50.0)
異性や恋愛について	42(25.9)	26(61.9)	16(38.1)
勉強について	39(24.1)	24(61.5)	15(38.5)
友人との対人関係について	23(14.2)	15(65.2)	8(34.8)
性格について	19(11.7)	15(65.2)	4(21.1)
経済問題について	17(10.5)	6(35.3)	11(64.7)
健康について	15(9.3)	10(66.6)	5(33.3)
家族や家庭内の問題について	11(6.9)	7(63.6)	4(36.4)
ダイエットについて	8(4.9)	3(37.5)	5(62.5)
社会問題について	5(3.1)	2(40.0)	3(60.0)
その他	9(5.6)	5(55.6)	4(44.4)

()は%を示す

悩みの内容として多いのは「将来の生き方について」（該当者ベース 91 人 56.2%）である。その内訳をみると、下級生 48 人（52.7%）上級生 43 人（47.3%）と学年差が大きい。次に「進路について」（該当者ベース 81 人 44.7%）は、下級生 32 人（38.3%）上級生 49 人（60.1%）と学年差が大きい。さらに「自分の能力について」（該当者ベース 56 人 30.9%）と続くが、下級生 28 人、上級生 28 人と学年差はみうけられなかった。「勉学について」（該当者ベース 39 人 21.59%）は 5 位であったが、下級生 24 人（61.5%）上級生 15 人（38.5%）であり、上級生は下級生ほどの悩みではなくなっているとも理解できる。大学の勉強に対応できる自信がついたのか、あるいは単に何とか進級してきた結果なのか、勉学は悩むほどの関心事ではなくなっていることが考えられるのかもしれない。「対人関係について」（該当側ベース 39 人 24.1%）は、下級生 15 人（65.2%）上級生 8 人（34.8%）と学年差が認められた。

3) 不安や悩みの対処

不安や悩みの対処に関しては表 7 に記した。

表 7 悩みの対処（N=161）

項 目	該当数（%）
自分ひとりで努力する	92（57.1）
友人に相談する	60（37.3）
成行きに任せる	52（33.3）
家族に相談する	22（13.7）
インターネットを利用する	21（13.0）
特に誰とも相談しない	9（5.6）
大学の教員に相談する	7（4.3）
相談できる相手がいない	3（1.9）
その他	9（5.6）

相談先については、「自分ひとりで努力する」が該当者ベースで 92 人（57.1%）と半数にのぼり、自らの力によって解決しようとしている。続いて「友人に相談する」が 60 人（37.3%）となり、青少年にあって「友人」が最大の相談先になっていることは、従来から指摘されていることであり、イメージに合致する結果といえる。しかし、「自分ひとり」で対処しようとする理由に関しては、悩みの内容から判断し「適切な相談相手」がみつからない、他人に相談できない「込み入った内容」である、「他人を煩

わす」程の悩みではないなど、さまざまな可能性が考えられるので解釈は難しく、今後の課題としたい。

しかし、逆にみれば「友人を主な相談先としない」割合もかなりあることに注意する必要がある。以下は「成行きに任せる」52 人（33.3%）「家族に相談する」22 人（13.7%）と続く。「大学の教職員に相談する」は、ごくわずかで 7 人（4.3%）にすぎない。不安や悩みがあっても、チャンネルとしての利用度はきわめて低いようにみえる。しかし、回答を「2 つ以内」と限定されたため、「友人」等に優先して選ぶことが少なかった、あるいは日常の細々とした相談は「不安や悩みの相談」として捉えられていない、などの可能性も考えられるので、いちがいに相談先としての機能を果たしていない、とはいいい切れないことは指摘しておきたい。

8. 大学生の姿

1) 学生生活で共有する意識

大学の大衆化時代といわれて久しいが、調査を通して学生に対する世間一般（大学関係者を含め）の評価と学生の実態とは必ずしも一致してはいないのでないかという思いを強くした。学生の意識には少なからず、大学は社会に出るための準備期間と見なし、自由な学生生活を謳歌したいという意識の定着が感じられる。つまり、学生の時にしかできないこと、学生の時だからこそやっておきたい（やらねばならない）ことをしたいとの願いに似た思いを感じるのである。勉強等に実践が伴わないようにみえるような学生の場合でも、単に勉強に対してやる気や、研究テーマに対しての関心が薄いという事ではなく、今しかない学生生活というこの時期にやるべきことに対しての優先順位が違うという感じ、あるいは優先順位そのものを決められないという事も考えられる。大学生のイメージとして、社会人や高校生に比べ十分な時間がある上に、社会的責任も少ないとみられ、それが気楽さに結び付いているのかもしれない。しかし、学生が気楽に見えることが、必ずしも現実気楽な学生生活を過ごしているということと一致しないように、世間の捉える遊びの意味と学生自身の捉える遊びの意味もまた異なっていると考えた方が良さそうである。学生たちが本分である学問を軽視しているのではなく（十分理解しつつも）、学問のためだけに大学生になった人は

少数であるかもしれない。大学に入学した理由が個人により異なっているように、学生生活もまた個人で異なるのは自然である。しかし、そうした違いの中にあっても「社会に出るための準備期間」としての経験や思考の場であるという意識は共有しているものと思われる。

2) 実感しにくい成果

大学での勉強の成果は学生にとって実感しにくいため、授業の内容が将来どのような役に立つのかなどに関して分かりにくいであろうことは想像できる。さらに本学が偏差値の低い大学という事実が存在することは確かであり、そのことと実質的な意味合いは横においても、どこかで客観的数値として学生達の意識の中に刻まれていることは十分考えて置かなければならないであろう。そのような学生の意識を勘案して考えると、自分に必要な経験の第一として勉強が選択されないのなら、それは勉強に対しての習慣や拘りの少なさだけに原因があるのではなく、大学教育必要な学力が十分に身につけていないことが、大学を「社会に出るための経験の場」と捉えられていることにつながっている可能性もあるのである。つまり、学問からの逃避行動として遊びがあるのではなく、学生時代でしかできない経験の一部として選択している可能性も指摘できる。しかし、結果として目的もなく遊んでいる学生との違いについては見た目には同じように学問をおろそかにしている大学生と見做されることになっている可能性がある。「自分が求めているものが何なのかわからない」の中には、経験として結びつくこと、つまり「実感できること」に対しては楽しいと感じている可能性がある。実感が持てなければ楽しくないともいえ、勉強や遊びも含めて「やりたいことをやれて、その上身についているという実感」できることに対しては充実感・満足感を持ちやすく、充実・満足感を感じていない学生達は、そのような状態に満足しているわけではなく「焦燥感」が芽生え、やりたいことを求めるという思いを強く抱いていると思われる。

9. おわりに

在籍している大学のランクがどの程度なのかについて知らない学生はいないと思われる。しかし、

そのことが個人にとってどのように意味づけられるかについてはさまざまである。大学のランクや学生個々の偏差値が学生生活を過ごす上でどのような意味づけをもって関わっているのかは、個人史によってのみ説明が可能となり、喜怒哀楽にかこまれて生活している一方で、どのように感じながら生きているのかということに関しては自明なことではない。大学生という時期においては、近い将来に備え現実的な選択や決定が課題として迫っている。なかでも職業といった社会人に向けての準備や、両親やその他の大人から精神的に自立し、自己の価値観や人生観を確立することは、この時期における発達課題として重要なところである。

笠原 5) は、せんじつめれば「自分とは何か」という問であると指摘する。「自分とは何か」という問いかけは、親から離れ、社会へと向けて自立していく青年期にあつて、先鋭にあらわれてくる。「自分は一体何がしたいのだろうか」「何に向いているのだろうか」「何ができるのだろうか」「自分らしさとは何か」「自分はどこから来てどこへ行くのだろうか」と、青年に問う。E.H.エリクソン 6) は、こうした青年の自分へ問いかけとその乗り越えを、アイデンティティ (identity 自我同一性) の確立として青年期の発達課題であるとした。これは、自己の単一性、連続性、不変性、独自性の感覚であり、同時にそれが他者との間にも合致しているという経験から生まれた自信のことであるとしている。つまり、自分はかけがえのない自分であるとして、そのような自己という存在は変わることなく、連続して成長しているという感覚ともいえよう。この自己の確立をめぐり学生たちは種々の試みや自由があるともいえる。

最後に、本調査を実施するにあたり、筆者が奉職し現在は閉学となった東京工芸大学女子短期大学部における「学生生活における調査」の概要を参考としたことを記しておきたい。なお、調査は学生委員が中心となり作成したものであり、非公開を前提とした報告である。

参考文献

- 1) 溝上慎一編『大学生の自己と生き方』、ナカニシヤ出版、p.4、2005
- 2) G.W.オールポート『パーソナリティー』、詫間 武俊、青木高悦、近藤由紀子、堀 正 共訳、（株）新曜日社、p.151、1982
- 3) 溝上慎一編『大学生の自己と生き方』、ナカニシヤ出版、p.19、2001
- 4) 前掲著 p.19、2001
- 5) 笠原 嘉 『アパシー・シンドローム 高学歴社会の青年心理』岩波書店、1984
- 6) E.H.エリクソン『自我同一性』、小此木啓 吾訳、成信書房、1983